

城陽市立久世保育園

「おひさま発電所」地域支援

運営の民間福祉法人呼びかけ

「集い」にどつとOB、卒園児

社会福祉法人・清仁福祉会が運営する「城陽市立久世保育園」(松岡和子園長・園児173人)で、太陽光発電装置を設置する計画が進められている。26日には、園で「おひさま発電をつくる集い」が開かれ、園児や保護者、地域の人が集まり、太陽光発電を体感した。開園以来43年間、地域に根差してきた保育園とあって、久世・深谷の2校区自治会連合会も寄付などでバックアップする動きが広がっている。

同園は、平成18年4月の移転新築を機に、市内初の「公設民営園」としてスタートした。運営主体の清仁福祉会は、市内に2保育園を運営しており、玄米や有機栽培の野菜、木の実など自然食を取り入れ、雨水タンクの水で水まきをするなど、自然との関わりを大切にしている保育方針を進めてきた。

は、改めて安価・安直・超危険な原発がもたらす破壊力の絶大さを思い知らされた。原発に頼ることなく、環境を破壊しないこと、自然エネルギーの大切さを、園児達に体得してもらうことの重要性を痛感した松岡園長は昨年5月、太陽光発電装置の設置を提案した。設置費用はざっと600万円。市民や企業などの協力を得ながら、京都府内の保育園、幼

稚園に「おひさま発電所」を16カ所に設置して、環境学習を進めている認定NPO法人「きょうとグリーンファンド」(板倉豊理事)と共同で設置することを決めた。計画が進む中、日常的な保育園活動を支援している城陽市社会福祉協議会や地域からも、支援の動きが広がり、久世・深谷両校区自治会連合会は、回覧板で各戸に

寄付を呼びかけた。26日に催した「おひさま発電所をつくる集い」には、保育園の保護者や園児はもちろん、保護者OBやその親、卒園児、地域の人達など350人がやってきた。園庭では、ミニソーラーカーが走り、ドラム演奏をする人形などが披露され、ソーラーパネルを避ると動かなくなるなど、「太陽パワーの威力」

に園児も興味津々。また、卒園児や保護者OBがメンバーに加わる、ターチャマンボクラブ、たんぼぼ村音楽隊、ケンタローバンドなどのグループが演奏で会場の雰囲気盛り上げた。食べ物コーナー、あそびのコーナーなども設けられ、にぎやいだひと時に。

なお、同園に設置される「おひさま発電」は発電全量買取が可能な10kW規模。温室効果ガスの二酸化炭素を年間4220kg削減することができるとのこと。これは、太陽電池を作るのに必要なエネルギーに相当するという。20年間稼働すれば、約80トンの二酸化炭素を削減できる計算。

なお、地域で呼びかけている寄付金は1口3千円、ほかに設置協力金の1口10万円を依頼しているが、こちらは5年後に基金から9万円が返還され、さらに4千円が還付金としてもどるシステムで、実際は6千円の寄付となる。今年7月には設置工事を完了させる見通しだが、将来的には防災の避難時用非常電源装置や床暖房などの設備を整えていきたいとの意向も。

寄付についての問い合わせは、久世保育園(52・4369)かきょうとグリーンファンD(075・352・9150)まで。



太陽光発電を体感する園児



卒園児らによる演奏